中学だって恋愛は自由

なおや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
中学だって恋愛は自由

【Ｎコード】
Ｎ１６３８Ｉ

【作者名】
なおや

【あらすじ】
小学から付き合ってる俺と里菜。里菜はいつも「中学生だから」って何でも避けようとする。そんなに中学じゃダメか？そんなことは無い。恋に中学も大人も関係ない。好きなのは好きなのだから…

プロローグ

「もう俺ら合計したら付き合って3年くらいになりそうなのにキスしたこと無いっておかしくないか？大輝は4ヶ月でキスしたし雪也は3ヶ月だぞ？」
「でもまだ中学生じゃん」
「いっつも里菜そうじゃん。『中学生だから』ってさ。そんなに中学生じゃだめか？」
「ダメじゃないけど早くない？」
「早くないよ、もう2組もしてるし。俺ら3年だよ3年。けた外れじゃん」
「まぁそうだけどね…」
「そんなに嫌か？」
「いや、そうじゃないんだよ？でもやっぱり…」
「気にすんな、付き合ってること自体知ってる人少ないし、誰にも言わないよ」
「うーん…。そんなにキスしたい？」
「うん。したくないの？」
「いや、そういうわけじゃないんだけどね…。じゃあ何でしたいの？」
「好きだから」
「え？」
「好きだからに決まってんじゃん。それ以外何があるよ」
「まぁね…」
「じゃあ俺の事好きじゃないの？」
「いや、好きだよ？」
「だってキスしたくないんでしょ？」
「ううん！大好っ
俺は10センチくらい小さな体の里菜の肩に手を回し、頭の後ろに

手をかぶせギュッと抱きしめた
「いいじゃん好きなら。愛に『中学生だから』とかなんてのは関係無いんだよ。好きなのは好きなんだから。だろ？」
「うん・・・」
「だから大人と同じように恋できるんだよ。『中学生』なんて言葉に縛られちゃダメだ。恋は自由だ」
「うん・・・」
「これからもずっと宜しくな。ずっとずっと、愛してるから」
俺は里菜の唇にチュッっと短いキスをした

プロローグ（後書き）

始めまして、なおやです
これは半分ホントの話で半分作り話です
こんな中学生もいるんだなーと思ってみてください
感想もくれたらうれしいです
これからよろしくお願いします

第一話　久しぶり

「そういえば塾の事聞いてくれた？」
「うん。聞いた聞いた。何かわかんないんだって。だからうちが紹介してあげる？って言ったら『うぅ～ん』みたいな。あと、携帯のこと言ったら『おぉ～』って言ってたよ」
「いっつも携帯とまるくせにね。実際偏差値６８以上とか無理でしょ」
「まぁ頑張りなよ。とりあえずハーゲンはなくなるでしょ」
ハーゲンとはハーゲンダーツというアイスのこと。一個３００円以上する高級アイスだ。５人で模試試験をして、一番偏差値が低かった人が４人にハーゲンをおごるというゲームをしているのだ
「そうだな。まぁ頑張って損はしないさ。早く塾やってくれないかなー。携帯止まってるから連絡全然出来ないじゃんね」
「まぁ言いたい事があればウチにいいな」
こいつは瑠菜。こいつは俺らの関係を知ってる唯一の女子だ。小学校も同じで仲は良いのだ
「ああ。ありがとな」
ってワケで俺と里菜はなかなか連絡が取れないでいた。携帯が止まっているため電話も出来ない、家にしようとしても家族にもこのことを言ってないからなかなか連絡できない。連絡できても部活をしていたりして遊べない日が多いのだ
　ある日俺が部活が休みの日、ちょうど親父は休日なのにもかかわらず仕事、親母と妹は買い物に出かけていった。これはチャンス！今こそ電話をするときだ！
プルルル・プルルル・プルルル・ガチャお！
「もしもし」
「あ、里菜？」

「うん。そうだよ」
「家に誰もいないの？」
「うん。ウチ以外はね」
「そうか。今日遊べる？」
「うん。今日は遊べるよ」
「よっしゃあ。じゃあ俺んち来てよ。何時ならこれる？」
「う～ん。３０分もしたらいける」
「わかった。んじゃあとでね」
電話してよかったー！早く家きれいにしないと。あとはテレビでも見て待ってよ
ピーンポーン！
お！来た来た！
ガチャ
「おぉ里菜！久しぶりだね」
「うん。電話きてからずっとワクワクしてた」
「俺も俺も。久しぶりに合うしね」
「うん…」
「どうしたの？」
「チュウしよ？」
「里菜から誘ってくるなんて珍しいね。言われるのってうれしいねぇ。いいよ。やっぱ一回すればどうってことないでしょ？」
「うん…」
「そんなに恥ずかしがらなくてもいいじゃん。そういう里菜も可愛いよ」
前と同じような短いキスをした
「帰りもしてあげる」
「うん。ありがと」
「じゃあまず上がって」
「うん。なにするの？」
「そうだなー。ゲームは？」

「良いけど何のゲームするの？」
「う～ん。２人でやるのないかも・・・」
「え～じゃあダメじゃん」
「じゃあパソコンで怖い動画でも見るか」
「無理無理無理無理！それだけはホンットに無理！」
「それだけ？じゃあそれ以外なら何でも良いの？」
「それ以外って？」
「Ｈっとかｗ」
「それもダメ！」
「嘘嘘ｗ」
「もー！」
「ホント可愛いね」
「なんていったら良いかわかんないからやめてよ」
「ホントは超うれしいくせに」
「だっていきなり言われたらそれはねぇ」
「ありがとっていっとけば良いの」
「わかった。ありがと」
「じゃあ遊園地行こ」
「良いけどお金持ってきてないよ？」
「ゼロ？」
「いや、２０００くらいはあるけど・・・」
「それ全財産？」
「今の手持ちはこれ全部」
「じゃあいいよ。もったいないからおごってあげる」
「いいよいいよ、家で遊ぼうよ」
「なにして？」
「Ｈｗ」
「おお良いね！」
「えぇ！？」
「嘘嘘ｗｗ」

「もー、ビックリしたじゃん」
「言うのが悪い。じゃあ行こう。手つないで歩きたいし」
「そういえばまともに手つないだことないね」
「だろ？だからいいじゃん。行こう」
「うん。そうだね。今度お金は返すよ」
「いいよいいよいいよ。彼氏は彼女におごるものさ」
「じゃあいつか恩で返すね」
「まぁいいや。そこまで言うなら勝手にどうぞ」
「じゃあ行こ」
「うん」

第一話　久しぶり（後書き）

見てくれてありがとうございます
自然な会話ですよね
これ書いてるとホントに彼女と遊びたくなりますね
また次回もよろしくお願いします

第二話　プレゼント

「そういえば俺チャリの後ろのタイヤパンクしちゃったんだった。里菜のチャリって後ろのタイヤのとこに荷物置き場みたいな二人乗りできるとこある？」
「ああ、あるよあるよ。２人乗りして行くの？ウチ恥ずかしいから嫌だよ？」
「なんでそんな恥ずかしがり屋なの～」
「しかもばれたら大変でしょ？一気に広がるよ？」
「まぁそれもそうだな。じゃあバス使う？」
「でも待ってる間とかバレそうじゃない？」
「もーじゃあ何で行くの？」
「歩いたら遠いよね？」
「遠いよ、駅だもん」
「でもそれしかなくない？」
「でも一緒に歩いてたらばれるじゃん」
「うーん。じゃあタイヤ直してきてよ」
「ヤダよ、時間かかりそうだし、金かかるし」
「じゃあやっぱ遊園地やめる？」
「バスで良いじゃんバスで」
「えー」
「乗るとこばらばらにすれば？」
「あーそれもありかも」
「バスの中でも離れとけば良いじゃん」
「でもそれも寂しい」
「じゃあ隣に座る？」
「それじゃバレルかも」
「じゃあ中学生誰もいなかったら近くに行くよ。俺後ろに乗るから里菜前にのってね」

「わかった。じゃあいなかったら来てね」
「うん。行く行く」
「じゃいこっか」
「うん」
こうして俺らは別々のバス停から同じバスにのることにした。そして俺はバスに乗り込み、里菜がいる次のバス停に向かった。中には中学生らしき人はおらず、次に入ってこなければ大丈夫だろうと考えながらバスに揺られていた。着くと里菜が乗り込み中学生はいなく、人も少なかったので近くに行き駅まで2人で話していた
「まだこんな時間か、ちょっと店でも見ていく？」
「別に良いけど見るだけでしょ？」
「まぁね、金も無いし…。欲しいもの見つかったら誕生日に買ってあげるよ。そんなに高くなければ」
「ホント？ありがと」
里菜はとびっきりの笑顔を見せてくれた
「いいよいいよ。普通でしょ」
「じゃあウチも頑張ってお金貯めて良いもの買ってあげよ」
「いいよいいよ、気持ちだけで十分。友達とカラオケでも行って遊んでたほう良いでしょ」
「じゃあ直也も買わなくて良いよ？気持ちだけで十分」
「無理無理。さっきのあんな笑顔見せられたら『マジ？』なんて冗談でも言えない」
「てれるからやめてよ」
「照れてる里菜も可愛いよ」
「…ありがと」
テレながらも里菜は笑顔で見つめてくれた
そんなこんなで駅に着き、店をいろいろ回っていると、おしゃれな洋服屋についた
「ここに良いのありそうじゃない？」
「うん。でも高そう」

「いいよいいよ、一回見てみよ」
「いいの？」
「うん。ほら、これとか可愛いじゃん！超にあうよ？」
「そう？チョッと派手じゃない？」
「そうか？じゃあこれは？ホラ、いいじゃん。うわぁ～抱きたくなる」
「なにそれ～」
「このモフモフ感やばいでしょ」
「まぁ確かにあったかいかも」
「だろ？1月なんだからこんなもんじゃないと」
「でもこれいくらするの？」
「約６０００だ」
「高いよ！いいよいいよ。他のにしよう？」
「でも正直欲しいでしょ？」
「欲しいけどいいよ。親に買ってもらう」
「ダメダメ。欲しいなら俺が買う」
「だって６０００だよ？」
「２ヶ月貯めれば買えるんだもん」
「ホントにいいの？」
「いいのいいの。楽しみにしててね」
「うん」
里菜は本当にうれしそうな顔をしていた。その笑顔を見れば分かる
「じゃあ遊園地いこっか」
「うん。楽しみだね」
「うん。ジェットコースター乗れる？」
「うん。大好き！」
「よかった～。乗れなかったらどうしようかと思った」
「乗れなかったら遊園地行かないでしょ」
「だよね」
遊園地に行くには駅からバスが通っていて、そこから行けるように

なっている
「じゃあいこっか」
「うん」

第二話　プレゼント（後書き）

なおやです
遊園地、行きたいですねー
もう彼女と同じところ3回行ってるから飽きたんですよね
またいいところ探さないと
次回で遊園地に着きます
そこでちょっと絡まれてしまって…
まぁ詳しくは次回で

第三話　高校生

「どこのバスでいけるの？」
「俺しらね」
「嘘ー！」
「ホントホント。探せば分かるでしょ」
「まぁそうかもしれないけど…」
「さぁ。探そう探そう」
「探してる間にバス行っちゃったらどうするの？」
「次のバスまで待つしかない」
「えぇ～」
「待ってる間も楽しいじゃん。話してればさ」
「まぁね」
5分くらい見ていくと、遊園地行きのバス停を見つけた
「ああ、ここだここだ」
「案外すぐ見つけられたね」
「だろ？そんなもんさ」
「でも？から探してよかったね」
「そうだな。後ろから探してたら相当時間かかったもんね」
「よかったね」
「うん。えーと今何時？」
「今は12時24分」
「じゃああと3分後だ」
「すぐだね。よかった」
「これ乗り遅れてたら14分待つことになってた」
「うわぁ～最悪」
「だからね。危ない危ない」
そんなこんなでバスが着き、2人で乗り込んだ。人は少なく、2人で座れる狭いスペースで隣で座ることにした。いろいろ話していた

らあっという間に２０分がたってしまった。遊園地に着き、チケットを買い、２人で門をくぐっていった
「うわぁ～やっと来たよ」
「うん。案外人少ないね」
「もうあきられちゃったんじゃない？」
「そうかもな。もの少ないし」
「だよね。でもやっぱりデートは遊園地だよね」
「お化け屋敷にでも入るか」
「無理無理無理無理！怖すぎ怖すぎ」
「大丈夫、俺が着いてる」
「えぇ～」
「そんなにいや？」
「う～ん。頑張ってみる」
「お。いいね～ありがと」
「ううん。いいの」
「じゃあまず何乗る？」
「最初はやっぱバイキングでしょ」
「お、良いね。すぐ近くじゃん」
「うん。いこいこ」
「うん」
するとどこかから
「なんだあいつら、デートかよ」
「だからね。あの坊主潰してこねぇか？」
「あの嬢じゃんちっちゃくて可愛いしな」
「あの眼鏡オタクじゃねぇの？」
「どうせ何にも出来ねぇよ。行こうぜ」
「ああ」
俺は眼鏡をかけてるし、デートって言っていたからたぶん俺らだろうとは思った
「なぁ、今の聞こえたか？」

「うん？」
「誰かが俺らのこと言ってたよ？」
「嘘？全然聞こえなかったよ？なんていってた？」
「『あの坊主潰そうぜ、あの嬢ちゃんも可愛いしな』って」
「嘘！？やばいじゃん！」
「大丈夫、たぶんあの2人組だから」
「でもたぶん高校生でしょ？」
「俺らしか狙えないようなカスだ。大丈夫」
この俺らの会話があっちに聞こえてたらしい。早歩きでこっちにむかってきながら怒鳴ってきた
「あぁ！？なにがカスだとてめぇ！」
「彼女いるからって調子乗ってんじゃねぇぞ！？」
「うっせぇなぁ」
「ってめぇ誰に口きいてやがる！」
「カスだよカス」
「やめなよ直也！」
「お前は良いこちゃんだなぁ。ちっちゃくて可愛い」
「俺の女にしゃべりかけんな。汚れる」
「うるせぇこのやろう！」
すると突然左の頬に向かって拳が飛んできた

第三話　高校生（後書き）

なおやです
ついに絡まれましたねー
こんな口きいて良いんでしょうか？
まぁそれは次回…

第四話　恐怖

ゴツッ！
俺は勢いで吹き飛んだ
「キャァ！」
「何がカスじゃゴラァ！」
「それが本気か？」
俺はムクッと立ち上がった
「あぁ！？なんだと！？」
「それが本気かっっつってんの」
「何だとてめぇ！！」
「ワリィけど俺昔空手やってたんだわ」
「！！…どうせ脅しだろ！？」
「だろうな。こんな眼鏡やろうがやってたなんて思えねぇしな」
「なんなら腹殴ってみれば？」
「テメェなめやがって！！！」
ドス！！！
「お前高校生だろ？」
「な…なんてカテェ腹だ」
「もうちょい強く殴れねぇのかよ。お手本見せてやる」
俺は左で右の頬を殴るふりをし、体勢を低くして利き手の右で思いっきりアッパーを食らわせた
ガツ！！！
「！！！」
「フン。まともに入ったな」
「テメェ何者だ！！」
「その辺の眼鏡やろうとは違うんだよ。テメェもやられてぇか！！！」
「ヒィ！…ックソォ！おい！大丈夫かヤス！」

「・・・・」
「チクショウ！」
そういいながらヤスという奴を背負い、逃げていった
「フゥ」
そういって俺は地べたに座った
「何であんなことできるの？怖くなかった？」
「俺こういうときになると自分でもへんなくらいビビんなくなるんだよね」
「嘘だぁー」
「ホントだよ。空手やってたからじゃない？」
「すごいね」
「だろ？里菜に何があっても絶対に守れる自身がある」
「うん。守ってもらえそう」
「あいつらみたいな彼氏嫌だろ？」
「うん。絶対無理」
「何があっても絶対守ってやる。あいつらみたいなことはしない」
「うん。絶対守ってよ？」
「ああ。んじゃ遊ぼっか」
「うん」
この後ジェットコースターやバイキング、いろいろなアトラクションで遊んだ。次はお化け屋敷。里菜がすごく怖がっていた奴だ
「ついにこの時間が来てしまったね」
「マジ最悪」
「いいじゃんいいじゃん。挑戦挑戦」
「いや挑戦じゃなくて、ちっちゃいころ人がやってるお化け屋敷いって超怖くてそれから無理・・・」
「大丈夫。俺がいる」
「いやマジ無理でしょ」
「まぁまずチケット買おうよ」
「う～ん」

俺は受付に行き
「小人２枚ください」
「ちょっと！勝手に買わないでよ！」
「いいんですか？」
「大丈夫です」
「では６００円です」
「はい」
「ありがとうございます。それではこちらからどうぞ」
「はいチケット」
「もー」
「早く来ないと１人で一周してきちゃうよ？」
「無理無理無理無理！分かった！じゃあ一緒に行こう！？」
「よし。じゃあこれお願いします」
チケットの半分を破ってもらい、カーテンの奥に入った」
「うわぁー無理無理無理」
「いけるいける」
「だってこれ無理でしょ～。暗すぎ」
「ダイジョブだって」
「いや無理無理無理」
「何でそんなに怖いの？」
「だって無理でしょ～ほら、あっちになんかいるし」
「お化け屋敷だもんそりゃそうでしょ」
※「いや無理無理無理」
「もー早く行かないとやばいって」
「だって無理でしょー」
「じゃあまずチョッと行ってみよ？」※
※×２０
するとカーテンが空いて
「早く行ってくれませんと次のお客様が来たとき」
「分かりましたわかりました。今から行きます」

このじてんできっと２０分はたっている
「そろそろ行こう」
「もーホントやだ」
「じゃあ手つないでいこう」
いつもは「こんな小さい二人が手つないでたらダメだよ。中学生だし」と言っていた里菜も誰もいないお化け屋敷ではすんなり手をつないでくれた
「そのつなぎ方で良い？誰もいないからカップルつなぎしても誰も見てないから恥ずかしくないでしょ？」
「いいの？」
「嫌って言う人いないでしょ」
「ありがと」
里菜は本当に怖がっているらしく。ギュッと手を握ってきた
「行けそう？」
「うん…」
「まず俺行くから」
「うん」
すると仕掛けが動き出す
ガタガタガタガタ！！！
「キャァ！」
「ダイジョブだって」
進んでいくうちに手は解かれ、里菜は横にいる俺を両手でギュッと抱きしめていた。俺は片手で里菜を包み込むようにしていた。正直、すごく進みにくかった。でもすごくうれしかった
「もうそろそろじゃない？」
「うん。もうヤダ」
「結構長いな」
長いと感じていたのは最初のがあったから。お化け屋敷自体は１５分ほどのものだ
「うん。早く終わって欲しい」

「だな」
俺は正直、終わって欲しくなかった。里菜がギュッと抱きしめてくれてる時間がすごくうれしかった。
「あ、あれじゃない？」
「あ！ホントだ！」
といって手を解き、走って出口に向かった。もっと長かったら良いのにと思っていた
「はぁついた」
「よかったよかった」
「うん。そろそろ閉園時間じゃない？」
「あと15分くらいか。じゃあ観覧車行こう？」
「ウチ観覧車無理なんだよね・・・」
「え！？なんで！？」
「実は高所恐怖症なの」
「だって俺んち5階だけどいっつも下見てるじゃん」
「あれくらいだったら良いんだけどね・・・」
「マジで？頑張ればいけるでしょ」
「いや無理無理」
「下見なきゃ良いじゃん」
「まぁそうだけど・・・」
「じゃあいこ。お化け屋敷も大丈夫だったじゃん」
俺は正直、観覧車の頂上でキスをしたかったのだ

第四話　恐怖（後書き）

なおやです
どうでしたか？あなたは、彼女はこんな人ですか？
俺の彼女はこんな人です。
モデルは俺の彼女ですからw
結構な人がこの小説を見てくれています
ぜひよければ感想が欲しいです
良ければ何でも良いので感想よろしくお願いします
次回。直也はキスを出来るのでしょうか？
観覧車に乗れるのでしょうか？
よろしくお願いします

第五話　3秒

「何でそんなに乗りたいの？」
・・・聞かれてしまった・・・
「だってデートの定番と言えば観覧車でしょ」
「ドラマとかでも良く乗るよね」
「だろ？だから」
「良く頂上でキスしてるよねw」
ここまできてしまったらもう言うしかない
「俺らもそれしない？」
「もしかしてキスしたかっただけ？」
「・・・まぁ・・・」
「嘘！？ホント？」
「え？なんで？」
「いや～ロマンチストだねぇ」
「良いじゃんたまには・・・」
「しょうがないなぁ。特別だぞ」
なんかものすごく恥ずかしい
「・・・ありがと」
「うれしくないの？」
「いや、うれしいけどまさか『特別だぞ』何て言われるとは」
「だってそうじゃなかったら乗らないよ？」
「そんないやなの？」
「だって高いもん！」
「そんな怖いの？」
「だってゴンドラごと落ちたらどうしようとかいろいろ考えるでしょ？」
「考え過ぎだって。普通考えない」
「え！？嘘！？真貴も言ってたよ！？」

真貴とは里菜の小学校の時からの友達で遊園地の話を前にしたらしい
「真貴の彼氏も苦労するんだろうな」
「『も』ってなに『も』って」
・・・ヤベェ、口滑った
「いや、別にそういうつもりじゃ」
「そんなに苦労してるなら振っちゃえば？」
「いやだから違うって」
「ホント？」
「ホントホント。絶対ホント」
しかしお化け屋敷の最初の２０分はさすがに苦労と言うかなんというか・・・
「なら良かった」
里菜はニコっと笑ってくれた
「じゃあ乗ろ」
「うん。がんばろ」
入り口を通り、おじさんが開けたゴンドラの扉をくぐり中に入った
「うわー怖い」
「まだ下じゃん」
「これから上がっていくんだよ？」
「たいした事ないって」
「うーん」
俺は四分の一上がったころに、里菜の隣に座った
「うわぁ！傾いた！」
「嫌だ？」
「何気この方が斜めになって良いかもw」
笑顔でそういった
「ほらもうこんな所だ」
「うわー高い！」
里菜は俺に抱きついてきた
「ダイジョブだって。落ちたりしないからw」

「もしかしたら錆びてるかもしれないよ？」
「そしたらやばいかもw」
「嘘！？ホント！？」
「嘘嘘w悪い悪い」
「もー！」
「ほらもう真ん中になる」
「ウァー高い高い高い高い」
「怖いなら目ふさいでやるよ」
俺は左手で里菜の目を隠し、右手で里菜の頭の後ろを支えて
チュッ
っと短いキスをした
「もっとキスしてあげる？」
「・・・うん。いつも直也短すぎ・・・」
「そんな恥ずかしがんなくて良いって」
右手はそのままで左手は里菜の手にかぶせた
3秒位だろうか。すごく長く感じた
するともう観覧車は下につきそうになっていた
「あ！早く降りないと！」
「あ！ホントだ！」
おじさんが扉をあけ、ゴンドラから外に出た
「さて、帰るか」
「うん」
すごく幸せな1日だった

第五話　３秒（後書き）

いつもありがとうございます！なおやです！
ユニーク１００人超えました！
本当にありがとうございます！
これからも頑張っていくのでよろしくお願いします！

第六話　風邪（1）

ある日、かかってきたことのない里菜からの電話が来た
「もしもし、佐々木ですけど直也君いますか？」
「あ！里菜！？俺俺！どうしたの？そっちからかけてくるなんて！」
「うん。あのね、ウチ風邪引いちゃったの。インフルじゃないんだけど熱高くてさ」
「それほんとか？」
「うん。今日起きたら熱あってね、お母さん仕事もう行っちゃって、竜太は遊びに行ってて今一人なの」
竜太とは里菜の兄貴。里菜は名前で呼んでいる
「そっかぁ。だいじょぶなのか？」
「うん。なかなか寝れなくてね、テレビとか見てると目が疲れてきてさ。何もすることないから電話したの」
「そっかぁ。喉は痛くないの？」
「うん。喋る分にはまだいいんだ」
「今から行ってやろうか？」
「え？いいの？風邪うつっちゃうかもよ？」
「いいよいいよ。うつって里菜が治るなら」
「そんなのダメだよ。来ちゃダメだからね」
「鍵開けといてね」
「ダメダメダメ。絶対ダメ」
「一緒に誰かいるだけで安心できるだろ？」
「それはそうだけど」
「気にすんな。俺最近風邪引かないから」
「ウチもそうだったよ？」
「大丈夫。俺は強い」
「ホントに良いの？」
「結婚したらこういうこともあるだろ？」

「…結婚って？」
「そこは気にするな。今から行くから。鍵開けといてな。頑張ってそこまで動いてくれ。そしたらしっかり看病してやっから」
「うん。ホントありがと」
「ああ。んじゃ今からしたくしていくからチョッとだけ待っててな」
「うん」
ガチャ
俺はしたくをし、6分後に家を出て7分後に里菜の家に着き、鍵が開いてる扉を開け、鍵を閉め、里菜がいる寝床にむかった
「おぉ里菜、だいじょぶか？熱はどれくらいあるの？」
里菜の枕の隣であぐらをかいて、里菜の額に手をあてながら質問した
「さっき計ったときは7度8分だった」
「結構高いじゃん。ほんとにだいじょぶか？」
「うん。久しぶりの熱だからチョッと辛いかも」
「新人戦で疲れたんだな。3位だってな。おめでとう」
「うん。ありがとう。新人戦ホント疲れた」
「ピッチャーだもんな。良く頑張ったよ」
「うん。ありがと」
頑張って作ってくれた笑顔は赤く染まっていた
「何時に起きたの？」
「1時間半くらい前かな？」
「眠くないか？」
「うん。全然」
「腹減ってたり喉乾いたりしてない？」
「うん。全然食欲わかない。喉は渇いてきたかも」
「味噌汁作るか？ネギある？」
「いいの？ネギはわかんない」
「見てみて良い？ってかネギ大丈夫？」
「うん。好きだよ」
「よかった。じゃあチョッと待っててね」

俺は作りながら里菜に届くように大きな声で
「寒くなーい！？小さい声で答えて良いよ！」
「うーん。微妙に寒いかも」
「わかった！」
俺はいっぱいネギを入れて、鰹節もいれた
「出来たよー」
「ありがとう」
「これ食うとあったまるし、ネギ体に良いからちゃんと食えよ」
「うん。そういえばさっきの電話の話だけどさ」
「うん。どうした？」
「結婚って？」
「あぁ。そうだそうだ。言ったなぁ」
「何？フザケ半分で言ったの？」
「いや、本気だよ。まだ中2だけど、高校どこ行くかわかんないけど、大学まで二人続くかわかんないけど、大学まで続いたら、いや続けて、卒業して、それまで一生懸命バイトして金貯めて、団地借りて2人で暮らして、・・・見たいなね・・・」
もう最後のほうになったら恥ずかしくて恥ずかしくて顔が赤くなるのが自分でも分かった
「ありがと。そんなに考えてくれてるとは思わなかった」
「でもそこまで行くかな？」
「うん。直也と前別れたとき気づいた。すんごく寂しかったもん。直也と付き合ってない毎日なんて」
「ありがとう。俺も別れてたときはホント最悪だった。楽しいことなかったもん」
「ずっとこのまま幸せでいようね」
「ああ」
俺は心のそこからうれしかった
「ほら。早く食べて食べて。さめちゃうよ」
「あ、うん。これすんごくおいしい」

「マジ？ありがと～。『おいしい』って言われるのってうれしいんだね」
「そう？今度はウチが作ってあげるね」
「マジ？よっしゃー！」
ニコっと今度はさっきよりも苦しそうな表情はなかった
「まだ寝れそうもない？」
「頑張れば寝れそうかも」
「じゃあこれ食べ終わったら寝るか」
「寝たら直也どうするの？」
「ｉｐｏｔでも聞いてるよ。起きたときすぐ何かしてあげられるように」
「ありがと」
里菜は味噌汁を食べ終わり、
「おいしかった。ごちそうさま」
「じゃあこれ洗っとくから寝といて」
「うん」
俺はチャッチャと洗い、寝床に行った
「寝れそう？」
「さっきよりは」
俺は里菜のそばで横になり、頭をポンポンと一定のリズムで優しく叩きながら
「さっさと寝て元気になれ」
「うん」
「隣にいてやるから、言いたい事あればいつでも言えな」
「ありがと」
「おやすみ」
「おやすみ」
１０分後。案外早く里菜は眠った

第六話　風邪（1）（後書き）

なおやです
久しぶりの更新でしたね
ネタがなかなかなくて困ってました
今風邪を引いているのは僕です
困ってます
まぁそれはともかく。いい切り方がなかなか分かりません
だからつい長くなってしまうんですよね
これから頑張って生きたいと思います。よろしくお願いします

第七話　風邪（2）

「うぅ～ん…うぅ～」
眠ってから３０分後くらいたったころ、俺の寝転んでる隣で里菜はうなされ始めた。こういうときは起こした方が良いのか、そっとしておいた方が良いのか全然分からなかった・・・が
「ぅ～ん。ぅ～ん・・・なおやぁ」
この瞬間俺は起こしたほうがいいんだと思い
「里菜！里菜！」
と言いながら体をゆすっていた
「うぅ～ん。ぅぅん・・・ぅん？」
「おい。お前大丈夫かよ。ずいぶんうなされてたぞ？」
「ん？直也？」
「そうだよ。俺だよ」
「直也ぁ…直也ぁぁー」
里菜は寝ている俺を寝ながら抱きつき、いきなり泣きはじめてしまった
「どうしたどうした。大丈夫大丈夫。俺はここにいるから」
頭をポンポン叩きながら言う
「だって直也が…ヒック…どこか暗いところに…ヒック…一人で…」
「ダイジョブだって。ここにいるだろ？」
「うん…怖かった…ウチ一人置いてどっか行っちゃうんだもん…」
「悪かったな、どこも行かないからダイジョブだ」
「うん…もう怖くて寝れない…」
「そっかぁ。まだ３０分位しか寝てないぞ？」
「うん。もういい」
やっと泣き止んでくれた
「寒くない？」
「うん。逆に熱い」

「やっぱり？布団蹴飛ばして寝てたよw」
「嘘ぉ～最悪」
「熱いんだろーなーってずっと思ってたけど冷えちゃいかんと思ってずっとかけなおしてたw」
「ホントゴメンね。迷惑かけて」
「大丈夫大丈夫。ホント熱いな。チョッとだけどけるか」
「うん。喉渇いた」
「ぬるめのホットミルクでも飲むか。熱いのは嫌だもんね」
「うん。いいの？」
「うん。ちょっと待っててね」
牛乳をコップに移し、レンジで温めた
「はいよ」
「ありがと」
「こんなもんで良いよね？」
「うん。ちょうど良い。ありがと」
「熱測ってみるか」
「あ、そうだね」
「どこにあるの？」
「ここに置いといたんだ」
「おお。しっかりしてるねぇ」
「置きに行くのめんどくさかっただけ」
「まぁいいさ。飲み終わったら測ってね」
「うん」
「さっき何度だったんだっけ？」
「確か7度8分だったような」
「そうだそうだ。低くなってると良いね」
「うん。たぶん低くなってると思うよ」
「そう？飲み終わった？」
「うん」
「じゃあ洗ってくるから測っといて」

「うん」
さっき同様チャッチャと洗い、里菜ところに戻った
「まだ？」
「うん。もうちょっとだと思う」
ピピピピ・ピピピピ
「お。なったなった。里菜見ないでおれに見せて」
「何で見せてくれないの？」
「俺から発表する」
「えぇー」
「いいからいいから」
「もーハイ」
「えーと…嘘！」
「え？何度何度？」
「7度7分！ラッキー7だ」
「なにそれー」
「でも下がったじゃん」
「1分だけね・・・」
「まぁ良いじゃん。汗かいてない？」
「かいてる…」
「着替えとかここにある？」
「無い…」
「持ってくる？」
「えー。変態になるよ」
「だってしょうがないでしょ。着替え見るわけじゃないんだから」
「だって恥ずかしいよ。下着見られるの」
「結婚したら普通だ」
「だってさぁ…」
「じゃあ自分で取りに行く？」
「それは辛い…」
「だろ？だから持ってきてやるって」

「いいよ。着替えないから」
「ダメだ。風邪引く」
「もう引いてる」
「ミスった。もっとひどくなる」
「うぅ～ん…」
「しゃあないしゃあない。ついでに俺は下着見たいだけじゃないからな。里菜のことを思っ
「わかってる。ウチの机の場所分かるでしょ？」
しゃべってる途中なのに…
「うん」
「そこの近くにたんすがあるからそこの下から４番目」
「わかった。じゃあちょっと待っててね」
「うん・・・」
「いいじゃんいいじゃん。いつかこういう日が来るさ」
「分かったから。早くしないと寒くなってきちゃう」
「おお、ワリィワリィ」
俺は机がある部屋へ行き、たんすを見つけた
「４番目だよね！？」
「うん」
「下から！？」
「うん。話し聞いててよね」
「悪い悪い！」
俺は聞いた場所を開き、取り、閉め、持って行った
「これでいい？」
「うん。ありがと」
「じゃああっち行ってるから着替え終わったら呼んでね」
「うん」
「ゆっくりで良いからね」
「うん」
・・・約４分後・・・

「いいよー」
「脱いだ奴は？洗濯機に入れれば良いよね？」
「えー嫌だ。汗でぬれてるし」
「いいからいいから。突っ込んでくるだけだ。一瞬一瞬」
「えー」
「ここにあったら邪魔だろ？」
「そんなに・・・」
「じゃまなの。ハイ。ちゃんと看病するんだからこういうのもしなきゃだめなの」
「もー。わかった。はい」
「ありがと。じゃあちゃんと一瞬で戻ってくるから」
持ってみると本当にぬれていた。一瞬でいれ、一瞬で戻ってきた
「はい。早かったでしょ？」
「うん。ありがと」
「何時ごろ帰ってくるの？」
「お母さんは仕事だから6時３０くらいに帰ってくる。お兄ちゃんは8時くらい」
「遅いなぁ。まだ１１時３０だぞ？あと7時間もある」
「そんなにいたらホントに風邪移るよ？」
「大丈夫。もう寝れない？」
「ううん。いろいろしてたら落ち着いた」
「じゃあまた寝たら？また下がるかもよ？」
「うん。わかった」
「うん。おやすみ」
「おやすみ」

第七話　風邪（2）（後書き）

なおやです
また寝て終わりです
やっぱ終わり方分かりませんわ・・・
いい終わり方が分かりません・・・
話し変わりますけどマジで感想ください
感想という感想が無いのであれば「頑張ってください！」でも「全話見ました！これからも頑張ってください！」でも応援コメントでも良いんで何かください。
本当にむなしいです
これからもよろしくお願いします

第八話　予知夢（よちむ）

１２時半。里菜が寝てから1時間たったころ、俺も腹が減ってきた。
でも店に行ってる間に何かあったら困るし、勝手にここのものを使うのも…
そんなこんな考えているうちに、３０分がゆうにすぎ、1時になってしまった
この３０分何もなかった間に買ってくればよかった…と後悔していた
店に行って、選んで、買って、戻ってくるのに頑張れば十分間
でももしレジが込んでたら…
などと考えていたらまた３０分
考えちゃダメなんだ。バッといって戻ってくればきっとまだ寝てるだろう
さっと家を出て、思いっきり走り店に行き、パンを2個手に持ちレジに行った。
前には2人。すぐ終わりそうだ。すると
「あれ？あれ？」
と店員は言い始めた
「どうしたんだいねぇちゃん」
と待っているおじさんが言う
「ちょっとお待ちください」
レジの故障だ。本格的に故障したらしく、
「すみませんがこの列にお並びの方は別の列に移ってもらえますか？」
周りを見ると、いつの間にかレジは込んでいた
買うのを断念し、パンを戻し、家に走って戻った。扉を開けると
「ヒック・・・・ヒック」
と里菜の泣き声が聞こえた。俺は寝床に走っていき
「里菜？どうした？」

「直也…ヒック…どこもいかないって…ヒック…行ったのに…
「ゴメン。ホントゴメン。腹へってて買い物行ってた。ホントゴメン」
里菜が言い切る前に、本気で謝った
「また怖い夢見たの…また直也が…どこか暗いとこ行っちゃうの…でも今回のは直也が何か言ってた…その続きも見てね…いきなり暗いのが真っ白になって…直也の後姿が見える用になって…追いかけようと思ったら…変な男たちにウチさらわれて…」
「怖かったな。ダイジョブだ。さらわれたら俺が絶対助けてやる」
「うん…ホント怖かった…すごく力強くて…」
「思い出すな。怖くなるだろ？」
「うん…」
「寝ろって言っても寝れないよな？」
「うん。もう無理…」
「熱測ってみよう。また1分下がってるかもよ」
「うん。でも結構寝たよね？」
「うん。2時間。もうちょいで2時になる」
「あと4時間位だね」
「ああ。早いな。時間たつの」
「ウチは寝てたからね」
「まぁな。んじゃ熱測ってみ」
「あ。そうだね」
体温計を取り、脇に挟んだ
「下がってるといいな」
「うん」
「寒くない？」
「うん。たぶん治ったと思う」
「よかった。汗は？」
「さっきよりかいてない」
「そっか。ホントに治ってるかもな」

「うん。はぁ、怖かった」
「夜は俺いないからな」
「うぅん…ヤバイ」
「明日電話頂戴。今日みたいに。声聞けば安心できるでしょ？」
「うん」
「じゃあそうしてね」
「わかった」
ピピピピ・ピピピピ
「お、鳴った鳴った」
「また見ちゃダメ？」
「うん。ダメ。頂戴」
「ハイ」
「あれ？さっきラッキー7だよね？」
「うん。そうだよ？」
「あららら？」
「えぇ？どうしたの？」
「上がったんじゃない？」
「嘘ぉ。最悪」
「嘘嘘。すごいすごい。7度1分だよ。ほら」
「ホントだ！なんだよぉ」
「良かったじゃん。もう学校行かなきゃいけない体温だよ」
「だね。よかったよかった」
「もうテレビとか見れるかな？」
「うん。たぶん大丈夫だと思う」
「あっちに布団持ってってテレビでも見るか」
「布団重いよ？」
「男をなめるな。こんなもんお茶の子さいさいだ」
「ありがと。じゃあ先あっち行ってるね」
「うん。ちょっと待っててね」
案外重くてビックリした。でも60？をだっこできるからたいした

ことはなかった
「よいしょっと。はい、いいよ」
「ありがと」
「布団かける？あっついよね？」
「うん。今はいいや」
「わかった。俺も隣で寝ていい？」
「いいけど風邪移るんじゃない？」
「治ってるから大丈夫でしょ」
「かな？移っても知らないよ？」
「いいよいいよ。俺の責任だ」
「じゃあいいよ」
そのまま6時までいろいろ話しながらテレビを見て、俺は帰った。
まさか里菜の夢が現実になるとは知らずに…
それどころか、夢のことなど一切忘れていた…
覚えていれば、こんなことには…

第八話　予知夢（よちむ）（後書き）

なおやです
この話のサブタイトル　予知夢　気に入ってます
ちょっとこれからいろいろ起こります
まぁ楽しみにしていてください
あとこれからＲ１５が出てくるかと思うんですが、俺が１４なんで
Ｒ１４ということでｗ
まぁこれからもよろしくお願いします

第九話　再会

里菜が風邪を引いてから一ヶ月くらいたったころ、俺らはボウリングをしに遊びに行くことにした
そこに行く途中には、周りからは「カス校」と言われている畠潟(はたかた)高校、略して畠校という高校があった
俺らはその高校の横にある公園で、チャリを置き少し話しながら休憩をしていた
すると畠校の生徒っぽい2人組がこっちに向かってきた
よく見るとこの2人、この前遊園地であったあの高校生だった
「おい、この坊主。前のあいつだぜ」
「おぉ。ホントだ。嬢ちゃんはやっぱかわいいなぁ」
「うるせぇ。話しかけんな」
「前は勝ったからって調子のんなよ」
「お前らに何ができんだよ」
「俺ら暇してるんだよな。今からだったら10人くらい集まるんじゃないか？」
「脅しか？」
「直也、いいよ。もう行こう？」
「おっと嬢ちゃん。それはいかんなぁ」
「こんな口利かれたんじゃ潰すしかねぇよ」
「じゃあ仲間集める前にお前らを潰すか？」
「直也！」
「いいからいいから。前の調子じゃただのカスだ」
「そういうこと言うからダメなんだよ！」
「じゃあ見てろ」
「じゃあ前はお前らから来たから今日は俺からいくぞ」
「そうか。掛かって来い」
「こりないヤロウだなぁ」

俺は相手に殴りかかった、前と同じように左で先に頬を狙い、よけられたとこをアッパー使用としたがそれもよけられた
前のをちゃんと覚えてたらしい
しかし俺も何もしてなかったわけじゃない
空いてる左手で相手のみぞおちを思いっきり殴った
これは思いっきりあたり、相手は苦しそうに丸まった
「次はお前の番だ」
「お前何中だ？」
「直也！そんなの教えちゃ
「災い町中だ」
俺の中学は昔、超荒れてる最悪の中学だったらしい、それでこの名がついたと担任が言っていた
「なるほどな。今度訪問してやるよ。給食の時間がいいかな？」
「ついでに俺らクラス違うぞ」
「いいさいいさ。先に見つけた方が餌食だ」
「学校なんかきたら大変だよ！ねぇ直也！」
「お前らは学校サボるのか？」
「もちろん。当たり前だろ」
「じゃあ俺のクラス教えとくよ。２－１組。３回の一番東側だ」
「おお。ありがてぇ。ついでにこの嬢ちゃんは？」
「教えるか」
「じゃあお前の組は最後だ。まず嬢ちゃんさがしてそのあとお前のとこ行ってやる。嬢ちゃんもつれてってお前がぼこぼこになるとこ見させてやるよ」
「やってみろ」
「直也！ほんとにダメだって！」
「もう無理だよ嬢ちゃん。必ず行くからまっときな。月曜日の昼だ」
「わかった。待っとくよ」
「ねぇホントダメだよ！」
「いくぞ」

「ねぇ」
「もう無理だ」
「・・・」
「あとよぉ」
「なんだよ」
「もし嬢ちゃんかお前、どっちかでも学校にいなかったら・・・」
「わかってる」
「ホントにやばいって」
「あとセンコウどもにも家族にも絶対言うなよ。言ったら殺すぞ」
「言うつもりなんてねぇよ」
「ならいいんだ。嬢ちゃんもだぞ？」
「話しかけんなって言ってんだろ」
「まぁいいさ。楽しみにしてるぜ」
くたばったもう一人を起こし、どこかに行った
「ねぇ直也…」
「ホントゴメンな。こんなことになるとは思わなかった」
「誰にも言わないの？」
「ああ。時間も正確にわかんないしな」
「『今日来るよ』くらい言ったら？」
「信じてもらえねぇよ」
「・・・」
「ホントゴメンな」
「・・・うん」
「絶対勝つから」
「武器とか持ってくるのかな？」
「ああ。たぶんな」
「どうするの？」
「こういうとき野球部だといいんだけどな」
「バット？」
「そう」

「鉄パイプなんて無いしね・・・」
「持ってけないしな」
「うん・・・」
「どうするかなぁ」
「・・・」
「いい事考えた！」
「なになに？」
「早く学校行って、鉄パイプ掃除ロッカーに隠せばいいんだ！」
「そっか！放課後まではあそこ開かないしね！」
「そうそう」
「でもどこで拾ってくるの？」
「確かに・・・」
「この辺で工事してるところってあった？」
「一箇所だけ」
「どこ？」
「今マンション立ててるじゃん。そこからもらってこようぜ」
「あるかな？」
「今日のボーリング中止していいか？」
「調べるの？」
「ああ」
「これは大変な事件だからね。いいよ。特別」
俺と里菜はそのマンションに行き、鉄パイプがあることを確認し、
いろいろ話した後帰った
当日
俺は早く家を出て、鉄パイプを拾い、学校に持っていき無事ロッカーにしまえた
これで準備万端
大戦争になりそうだ

第九話　再会（後書き）

なおやです
あらら～
大変なことになりましたねぇ
どうなることやら・・・
ついでに俺は明日デートに行きますw
まぁ次回をお楽しみに・・・

第十話　襲来

普通の授業が始まり、普通の休み時間を過ごし、普通の１日を送っていた
これから皆が巻き込まれると考えるとすごく申し訳なかった
しかし言っても信じてくれるわけも無いだろう
昼までの時間がたんたんとすぎていった
そして１２時２４分。４時間目の授業があと１５分ほどで終わり、給食の時間だと皆は思っていただろう。いつもの俺ならそう思っていただろう
校庭からバイクの音がし始めた
ブンブンブンブン！！！
俺は窓側の席なのですぐに校庭を見下ろした
ついにあいつらが着てしまった
人数は２０～３０人ほどで、バッド、鉄パイプなどを全員が持っていた
俺は皆に言った
「皆。悪かった」
先生が言った
「どうした？」
「外のバイク、皆見てくれ」
「バイク？・・・何だアレは！」
先生は急いで教室を飛び出した
そして俺の大親友の航平が
「お前何した？」
「昨日ちょっと絡まれてな」
「誰にだ？」
「畠校の奴らだ」
「それ本当か？」

「ああ」
そういいながら俺はロッカーに向かい、皆の視線を浴びながらロッカーをあけ、鉄パイプを取り出した
すると航平が
「お前マジなのか？」
「しょうがねぇだろ。あんな人数で来るとは思わなかったけどな」
「お前馬鹿だろ」
「ああ。馬鹿だ。ホントに皆すまなかった」
すると
ピーンポーンパーンポーン
「不審者です！不審者です！教室の鍵を全部しめ、机を積み重ねるなどして入れないようにしてください！」
ピーンポーンパーンポーン
「じゃあ行って来るわ」
「どこにだよ！」
航平はいつも出さないような声を出して俺を止めた
「3組だ」
「3組？」
里菜の組は3組。俺が一緒にいれば怪我人は少なくなるはず。そう考えていたがそんなことといえない
「外からはまだバイクの音がする。きっと作戦を練ってるんだ。俺は他のクラス行って皆1組に集めてくる。皆きたら閉めて机とか積み重ねておいてな。俺はついでに来ないから。んじゃ行って来るわ」
俺は1組から出て行き、3組に行った
「ガラガラ！」
「キャア！」
と女子の悲鳴が聞こえた
「悪い悪い。驚かせて」
「直也！？何でそんなもの持ってるんだよ！」
ほとんどの男子が口をそろえて言う

「あいつらが来たのは俺めあてなんだ。ホントにゴメンな」
「何で俺らまで巻き込むんだよ」
俺の部活の部長、翼が言った
「ホント悪かった…だから皆1組に逃げてくれ」
「何で1組なんだ？」
「一組は最後に行くって言ってた。俺は最後なんだ」
「ほかにめあてがいるのか？」
「ああ・・・」
「誰だよ？」
「それは・・・」
「なんだよ。教えられないってか？」
「これは俺らの問題だ。気にしないで逃げてくれ」
「わかった」
「皆！そういうことだ！ホントにすまないと思ってる！今すぐ1組に逃げてくれ！」
皆はいっせいに1組に逃げ込んだ
そのあと4組に行き、4組にも事情を話し皆非難させた、ついでに2組にも寄っていってこれを伝えてくれともう一人の大親友大輔に伝え、準備は整った。なかなかあいつらは来ない。外をのぞいてみると、外では先生たちとの攻防戦が始まっていた。次々と殴られていき、次々と先生たちは倒れていく。俺は本当に申し訳なくて、3組に戻った。3組には里菜が残っていた
「直也…」
「ヤバイな、まぁ頑張ってみるさ」
「無理だよ…」
「まぁ殺されはしないはずだから、安心しろ」
「・・・」
俺は窓を開け外に向かって
「おい！先生たちは関係ないだろ！今俺は3回にある2－3にいる！早くきやがれカスども！」

こういうしかなかった…こうするしか気を引く方法なんて無かった・・・

「直也！」

「しょうがないだろ！こうするしかないんだ！」

すると外から

「おい小僧！今からそっちに行ってやる！ちょっと待ってやがれ！」

ついに、あいつらとの決戦が始まる・・・

第十話　襲来（後書き）

ついに来てしまいましたねー
一体主人公はどうなるのでしょうか…
ついでに今日映画を見に行きました、すると！
なんとそのホール（？）には俺と彼女意外誰もいなく、貸切状態だったのです！
いやーよかったね～
あと、やっと1件お気に入り登録してくれた人が現れました！
本当にありがとうございます！
それでは次回お楽しみに！

第十一話　1回戦

「直也、ホントに来ちゃう」
「死んだらゴメン」
「そんなこと言わないでよ！」
「わかんないだろ、死んだときのためだ。もし生きてたらちゃんと救急車呼んでね」
「どうやって？」
「職員室の向かい側に事務室だかがあるだろ？そこに電話があるんだ。それ使っちまえ。まぁたぶん先生が誰か連絡してると思うけどな」
「・・・」
「大丈夫、心配すんな」
「心配するよ。だってあんな大人数だよ？」
カランカランカラン
鉄パイプやバッドなどの音を立てながら階段を上がってくる音が聞こえた
「きてるよ！」
「ああ」
すると遠くから
「3階っていってたよな」
「ああ。ここだ」
「えーと。じゃあ2－4から行くか」
「ああ」
カランカランカラン
「来てる来てる」
「ああ」
そういって俺は息を大きく吸い込んだ
そして

「俺は3組だ！2人ともいる！3組に来い！」
すると
「よし！行くぞ！」
ダダダダダダ
走ってこっちに向かってきた
ガラ！
「よぉ坊主」
「武器なんて持っちゃって」
「お前らもだろ」
「じゃあこういうのはどうだ？」
「なんだ」
「勝ち抜き戦だ」
「順に俺が戦ってくってことか」
「そうだ。いい考えだろ？」
「武器は？」
「ありだ」
「わかった。ありがてぇ」
「よし。じゃあ一番手。カズ。行け」
「オス！」
その辺にいそうな普通の体系の人が出てきた。声は低くなく、これまた普通だ
「お前だったら3秒で終わらせてやる」
「うるせぇ坊主」
「じゃあ始めるぞ。よーい・・・始め！」
「オラァァァ！」
両手でギュッと握っているバッドを真上から振り下ろしてきた
俺は鉄パイプを横に持ち、それを防いだ
カキン！
相手の力は思ったよりも強く、受けた後の手はジンジンしていた
俺は左足で相手の腹部を狙ったがよけられた

続いて鉄パイプを縦に持ち、バッドでボールを打つようにスイング
をした
カキン！
それを相手はバッドで止めた
２発で手は限界に近くなってきた。想像以上に武器は痛い
すると相手はバッドで俺の腹部をついてきた
ドゴ！
「なに！？カテェ！」
「クゥ・・・」
何気苦しかった、毎日鍛え上げてた腹筋もやはりバッドはきついら
しい
しかしその隙を突いてパイプをまた横腹に向かってスイングした
ズフ！
「グォォ」
まだかろうじて立っている、しぶといヤロウだ
しかしその一瞬、相手はひるんで力が抜けていた
俺はみぞおちを狙って思いっきり突きをした
ドフ！
「ガハ！」
力は全然入っていなく、キレイに食い込んだ
相手は倒れこみ、足をばたばたさせながら苦しんでいた
「どうやったら勝ちなんだ？」
「意識を飛ばすまでだ」
「わかった」
俺は側頭部に向かってパイプを振り下ろした
ガツ！
「う！」
動かなくなった
「覚えて置けよ？お前も負けたらこうなるんだ。間違って殺しちゃ
うかもな」

「それは残念だ。一つ質問いいか」
「なんだ」
「こんな人数とやっていくのか？」
「いい質問だ。勝ったら2人、3人、4人と一人ずつふやしていくことにした。俺らの人数は22人。最後は1対6になる。それに勝ったら俺とのタイマンだ」
「悪いそれは無理だ」
「こんな簡単に勝ったんだ。いけるだろ」
「体力がもたねぇ・・・」
「じゃあ休憩をやろう。5分ほどだ」
「わかった。ありがてぇ」
・・・5分後・・・
「じゃあ2回戦始めるか。じゃあトモとシン」
「オス！」
「オス！」
両方背はでかいが細っちい体をしている
「よーい。はじめ！」
第2回戦が始まった

第十一話　1回戦（後書き）

一回戦。勝てましたねー
人数が増えていくって辛いですよね・・・どんどん強い相手も出てくるし人も増えるし・・・
一体どこまでいけるのか？生きれるのか？
次回をお楽しみに・・・

第十二話　2回戦

相手は長い鉄パイプを真ん中で持ち、孫悟空の如意棒のように持っている
「うぉぉぉぉ！」
「うぉぉぉぉ！」
二人は一斉に掛かってきた
2人一斉に上から鉄パイプを振り下ろしてきた
カキカキン！
俺は横にしてもち、それを防いだ
なぜか弱かった、しかし次の瞬間その理由が分かった
あたったと思ったらくるっと鉄パイプを1回転させ、2人そろってつきをしてきた
ドツドツ！
つく力はやたら強かった。それに棒にすごくなれている、テクニックがすごい
「グ！」
呼吸が1秒ほど出来なかった、みぞおちに突き刺さったからだ
鍛えていたつもりだったが、通用しないようだ。丸くなるほど苦しかった
「こいつらは棒の使い方はかなりトップクラスだ。なめない方がいいぜ」
「ああ、これはビックリだ」
俺はそういいながらしっかりと立った
これから人数が増えていくのかと思うとそれだけで立てなくなりそうなほど精神的に辛かった
俺はとりあえず里菜を守る。それしか考えていなかった
もし里菜がいなければもうそろそろずたずたのボロボロだ
俺はとりあえずかたっぽを先にやってしまおうと思った

次来た攻撃はカウンターのことだけを考えるようにした
相手は顔を合わせて、二人でコクンとうなずき
「オラ！」
「オラ！」
とまた上から振り下ろしてきた
俺は左にいるシンという奴に飛び掛りタックルした
次は本気で来たようだ、トモと言う奴は地面に思いっきりパイプをぶつけ手がかなり痛そうだった
シンは勢いで吹き飛び、仰向けになって倒れた。一瞬だったが軽いのが分かった
俺はしっかり持っていた鉄パイプでシンの顔面に一発振り下ろした
鼻は潰れ、歯は取れ、相当グロかった
ゴツ！
「アァ！」
腰に重い一発を食らった
俺は持っているパイプごと半回転し、相手の膝に思いっきりパイプを当てた
ガツン！
「オオォ！」
膝にもろ食らい、骨が折れたかもしれない、ガツン！と言う音と一緒にバグッ！と言う不気味な音がした
相手は思わず倒れこんだ、その隙に俺はとりあえずパイプで相手を滅多打ちにした
「もういいだろう」
「ハァ、ハァ、ハァ」
「いくら疲れてても5分は5分だからな」
「あぁ、ハァ、ハァ、ハァ」
「大丈夫？」
「ああ、まだチョットしか当たってないから、でも体力が…」
「うん…頑張って」

「ああ。で3人は無理かもしれない…」
「そうだ。先に言っておくが3人組みに勝ったやつはまだいないぞ」
「やっぱな。もう限界に近い」
「まぁ頑張れ。お前なら出来るさ」
「どうも」
「じゃあ次、健二、充(みつる)、高志」
これは勝てないだろう。見た瞬間思った
きっと全員65キロは超えてるだろう。半そでのTシャツからはむき出しの血管とゴツゴツの腕が顔をのぞかせていた
「じゃあそろそろ5分だ。今回は武器は無し。わかったな?」
「ああ。わかった」
「じゃあよーい。初め!」

第十二話　2回戦（後書き）

なおやです
気づいたらユニーク３００超えてました！
皆さんありがとうございます！
でもやっぱり感想は欲しいです・・・
ぜひよろしくお願いします！
それでは次回・・・

第十三話　3回戦

「おらぁ！」
まずは一人、極太の腕でラリアットをしてきたのをしゃがんでよけた、するともう一人が
「デリャァ！」
といって顔面に膝蹴りをしてきた、これはよけられなかった
ゴギ！
鼻が折れたらしい、ボギ！と言う音がした
鼻血は噴出すように出ている
俺は仰向けに吹き飛んだ、そこにもう一人が来て、俺の上でジャンプすると、膝を立てミゾに向かって落ちてきた、俺はそれを転がってよけた
ゴズ！！
「ガァァァァ！！」
教室の床は固い、今の勢いで行ったら皿は割れるだろう
一番最初に来た男が転がってよけた俺の顔面を思いっきり蹴ってきた
ドツ！
さらに鼻血はすごい勢いで出続ける、折れた鼻の骨が、もう鼻を切断したいと思うくらい痛かった
「アァァァ！！」
初めて俺は叫んだ
もう一発蹴りが飛んでくるのが見えた
俺はそれを腕を交差にしてそれを頭で抑えるようにして止めた
手はものすごいビリビリという激痛が走った。こいつらの蹴りはハンパ無い
俺は相手の股間に向かって蹴りを入れた、相手は不意を疲れたようでもろにあたり、相手は相当苦しんでいる
次に膝蹴りしてきた奴が俺の上に乗ろうとしてくる、俺は全力で相

手の顔面を殴ろうとしたがよけられ、逆にカウンターを食らってしまった
一瞬意識が飛んだのが分かった、もう正直目はクラクラで戦える気力など無に近い
相手は俺の上に乗ってきて殴りかかろうとしたが、俺は脚を思いっきり上に上げ首を取り、床に叩き付けた
しかしまだ安心は出来なかったので、相手の顔面を１０回くらい殴った後、股間を蹴った奴のほうに向かっていき、横たわって苦しんでいる相手の顔面を蹴飛ばした
バギ！
相手も鼻が折れたらしい。出血もすごい
しかし俺は蹴り続けた。相手はもう手も動かない
最後に皿が割れたと思われる奴のほうに向かい、そいつの顔面も何発も何発も蹴りまくった
「終了！」
「ハァ、ハァ、ハァ」
「普通はあの膝蹴りで抵抗できなくなるはずなんだけどなぁ。タフだタフだ」
「ハァ、ハァ、ハァ」
床は鼻血で真っ赤に染まっていた
「直也！大丈夫！？鼻が！」
曲がっていたらしい。やはり折れたんだ
「ハァ、ハァ、血が止まんねぇ。目がクラクラする」
「大丈夫！？」
「あぁ・・・たぶん、だいじょうぶ・・・だとおも
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
俺が目を覚ましたとき、教室ではない別の場所にいた
たぶん相手の基地かなんかだろう。倉庫らしい
里菜は椅子のようなものにロープで締め付けられていた
「里菜…だいじょぶか・・・？」

里菜は泣いていた。声を出して泣いていた
「ウチは何もされてないけど…直也は？」
「大丈夫…」
「おい！コイツ目覚ましやがったぞ！」
「何倒れてんだよ坊主。しっかりしてもらわないと困るなぁ。さっきの続きと行きますか」
「やめて！これ以上直也を傷つけないで！」
「嬢ちゃんは優しいねぇ。でもそれはチョット無理だ。今までの時間休憩してたんだから、１５人一気にいけるよな？」
「・・・」
「おい！どうなんだよ！武器はありだ！分かったか！」
「ねぇ！やめて！」
「・・・」
「ＹｅｓもＮｏもいわねぇ。じゃあどっちでもいいんだな。やっちまえ」
「オス！！！！！！！！！」
１５人の返事が倉庫じゅうに響いた
「よし！行くぞ！」
「ねぇやめて！何でもするから！」
「おいちょっと待てお前ら！」
「オス！！！！！！！！！」
「嬢ちゃん。何でもするって本当か？」
「そのかわり、直也を傷つけないって誓って…」
「ああ誓うさ。そういうのいいよねぇー何でもするから助けてみたいなの。じゃあこういうことでもいいんだな？」

第十三話　３回戦（後書き）

なおやです。
ついにへんなとこ来ちゃいましたね…
次の話はＲ１４になります
（俺が１４だからｗ）
そういうのが嫌いな方は抜かしてください
それでは次回…

第十四話　復活（前書き）

こちらには若干Ｒ１４系のものが入っています
苦手な方はご遠慮ください

第十四話　復活

そういうとボスらしき1人の男は里菜の上着を破き始めた
「おい…やめろ…」
こんな小さな声じゃ聞こえもしない…
自分の惨めさに涙が出てきた…
「おい！お前らも手伝え！まずは全部脱がすんだ！」
「オス！！！！！！！！」
里菜は無言だった…ずっとずっと…心は俺以上に傷ついてるはずなのに…
「嬢ちゃんキレイな体してんなぁ。彼氏はうらやましいなぁ」
「・・・」
「やめろ…」
「そういや電マとか無かったっか？」
「オス！！一月ほど前に捕まえた女を拷問するために人数分ドンキで調達してきたはずです！」
ドンキとは格安でいろいろなものが売っている若者には人気の店だそこには電マやエアガン、ゲームに食料、チャリに服、アクセサリーなど、本当に何でもそろっている
「よし！それもってこい！あの女以上に遊んでやる」
「オス！！」
すると男は走り出し、がたがたとあさった後、まず半分くらいを持ってきて、一人ひとりに配った、そしてまたあさり始め、残りを持ってきて、全員に配った
「よぉ～し。始めるか。じゃあまず2人。乳首から攻めろ」
「オス！」
「オス！」
ブィィィィィィィン！！！
「あぅ！！ぁ！あん！」

「よぉ～しいいぞいいぞ。いい感じ方するなぁ」
「あぁぁん！あ！ぁぁん！」
「やめろ…」
「あぁん！あぁ！ぁん！」
「やめろ…」
「じゃあ次クリ行っちゃえ」
「オス！」
ブィィィィィン！！！
「あぁぁあぁ！！うぅん！いやぁぁ！」
「やめろ！」
「ストップ！」
「オス！！！」
「何だテメェ！」
「やめろ・・・」
「あぁ！？」
「やめろって言ってんだ…」
俺は全身の力を搾り出して立ち上がった
「おぉ。まだ立てたとはな」
何も考えられなかった、もう助けることが頭にインプットされたかのような感じで、勝手に体が動き出す
「こっちまで歩いてこれるか？きたらきたで遊んでやるよ」
一歩一歩、確実に前に進んでいる。すべては里菜を助けるために
「おぉ。おぉ。頑張れ頑張れ」
「直也…ダメ…」
一歩一歩、前へ前へ…
「こんな奴俺が殺してやる。嬢ちゃん。別れの言葉をどうぞ」
「直也ダメ！助かるんだから！」
あとちょっと…
「直也！」
あとちょっと…

「オラァ！」
いきなり相手は右手で殴ってきた

第十四話　復活（後書き）

なおやです
あらら～
やばいやばい。死にそうですね
可愛そうな2人…
まぁ続きをお楽しみに…

外伝～挿入歌～　愛してる

［Aメロ］
どこまでいけるのかな
ってお前も思っているかな
「高校行ったら別れる」
どこの中学もそんな感じかな
［Bメロ］
もしもお前が本気なら
そんな壁余裕で超えられる
俺は本気なんだ
一生一緒に生きてけるんだ
［サビ］
まだこんな年齢だけど
なんも将来に安心は無いけど
ただこの俺が言える事といったら
お前を幸せに出来ること
絶対に悲しませないことが出来るってことさ
［Aメロ］
中学生だから
ってお前はいつも言うけれど
そんなに何が気になるの
愛してるのなら関係ないだろ
［Bメロ］
もしもお前が愛すなら
そんなこと余裕でできるだろ
俺も愛してるんだ…
［サビ］
まだこんな年齢だけど

なんも将来に安心は無いけど
ただこの俺が言える事といったら
お前を幸せに出来ること
絶対に悲しませないことが出来るってことさ
［Cメロ］
最後に一言
愛してる
ただ愛してるんだ

外伝～挿入歌～　愛してる（後書き）

なおやです
これの歌詞作ってみました
曲も作成中です
出来たら報告します
よろしくお願いします！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1638i/

中学だって恋愛は自由

2010年11月24日15時43分発行